

## 圏外のアンテナ

[手は口ほどに]の巻

突然ですが、わたしの手のひらにはシワがない。

手の甲は年相応。指はバレーボールの突き指で曲がってしまった。だが、手のひらだけは、つきたてのお餅みたいにツルツとしている。

辛うじて、生命線と頭脳線と感情線はくっきり。でも、つなぎの細いシワが見当たらない。人に見せると、「手相3本しかないの？」と、笑われる。

マンガみたいな手のひらなのだ。

さて先週のこと。原宿のスタジオで撮影に立ち会う仕事があった。その帰り道、夜7時くらい？ お腹はすいていなかったが、冷たいジントニックを飲みたい気分が、止まらなくなった。

そこで珍しく、前に一度だれかに行ったことのある、外苑前のバーに立ち寄ることにした。

少し歩き、地下に通じる階段を降りていく。そう、そう。ここ、ここ。古いドアを押すと、シャカシャカとシェーカーを振る音が聞こえてきた。

カウンターの空席にすべりこんで、お目あての一杯をのどに流し込むと、その日はじめて、ほっとした。

こちらがくつろぐ気配を察したのだろう。しばらくすると、隣にいた女性が話しかけてきた。

「手相を見てあげる」と言う。

きちんとした服、イヤな感じではなかったので、片手を開いて差し出す。手を両手で支えて「仕事はどんな？」と聞いてくる。まるで本物の占い師のようである。

「えーと。文章を書いたり……」「ふーん。それにしても、手相に屈託がないなあ」

「……」「悩みとか迷いとか、何もないわね。文章、向いてないかもね？」

バーテンが、首をかしげてこちらを見た。そんなことをいいながら、すでに女性は支払いをすませていた。靴をカタンといわせて立ち上がると、サッとドアを出て行く。「ちょっと、ちょっと！」と引き止めたいわたしのほうなんか、目もくれず……。

屈託がないって？ あーあ。今年も春から、前途多難である。

=2020年1月24日掲載=



困惑の、青山通りの夜はふけて